

松本清張記念館

◆館報◆
2004. 12
第17号

十万分の一の偶然は、

あなたが作ったんです。



『十万分の一の偶然』 昭和56年7月 文藝春秋

現在入手できる本

松本清張全集43巻(文藝春秋)

『十万分の一の偶然』文藝文庫(文藝春秋)

『十万分の一の偶然』は『週刊文春』に昭和五十五年三月二十日号から五十六年二月二十六日号まで連載された。

目次

- 古川薫氏講演会…………… 2
- 企画展 松本清張作品を彩る単色の世界…………… 4
- 清張原風景「点描」…………… 4
- 展示品紹介…………… 5
- 探検！清張記念館…………… 5
- みんなの広場…………… 6
- 友の会活動報告…………… 6
- 朗読劇「或る『小倉日記』伝」…………… 7
- トピックス…………… 8

作品紹介

A新聞主催の「読者のニュース写真年
間賞」に、最高賞として「激突」が入選
した。「激突」は夜間の東名高速道路で
起きた玉突き事故直後の様子を撮影し
た、凄惨で迫力のある作品であった。こ
れには読者の反響も大きかった。賛否両論あるなか、
新聞社側はこれにこたえて、審査委員長である古家庫
之助の言うところの「二万に一つか、十万に一つの偶然
というほかない」決定的瞬間を捉えたこの写真を、評
価するという内容を掲載した。

「激突」の撮影者、山鹿恭介は藤沢市に住む保険外
務員である。アマチュアながら報道写真を志し、その
主張が強いあまり所属していた「湘南光影会」のメン
バーと衝突、退会してから一匹狼となっていた。その一
方で、古家庫之助に私淑し、弟子のような付き合いを
始めていた。

「激突」の題材となった玉突き事故について、密かに
調査を進める男がいた。沼井正平は事故によって命を
奪われた山内明子の婚約者である。事故は挙式の一
週間前であった。正平は偽名で恭介に近づき、ぜひ一
度、撮影に同行したいと持ちかけた。しかしその真意
を恭介のほうでも気づき、正平を問い詰めるために
大井埠頭の人気の無いクレインの上におびき寄せた。
震にかかったかと思われた正平にむしる目算があった。
自分の「功名心」のために作った「偶然」に、婚約者を
殺された正平は、「激突」の撮影者に復讐を果たす。
そして、次なる標的は…

万に一つの偶然に遭遇したいという報道写真家の
心理と、そこに生まれる疑惑とに焦点を当てた、昭和
50年代の代表作。

(学芸員 柳原 暎子)

松本清張記念館開館6周年記念講演会

古川薫氏 講演会

清張文学管見『徒労感の美学』—『相模国愛甲郡中津村』を中心に



古川薫

大正14年生まれ、山口県下関市出身、現在も同市在住。
教員、山口新聞編集局長を経て作家に。
平成3年、声楽家・藤原義江の生涯を描いた
『漂泊者のアリア』で直木賞を受賞。
資料に基づき幕末の志士たちを描いた作品が多い。



私にとって松本清張は恩人です。私が初めて直木賞の候補に挙がったのは昭和40年、「走狗」という短編でしたが、ものの見事に落選しました。その選評も惨憺たるもので、口の悪い選考委員に酷評もされました。その中で清張さんただ一人が私を推してくれました。結果九対一で真つ先に討ち死にしたかたちとなりましたが、「最も将来伸びうる人」とエッセイを送ってくれました。これは本当にうれしかったです。清張さんはエッセイで、新人の頃、自分の作品がどのように評されるか、隠れるようにして読んでいた記憶がある。私は選評を書くとき、隠れるようにして読んでいるであろう人の気持ちを考えてながら選評する、と書いています。私に対する評価もこの気持ちで書いてくれたと思うのです。私は清



8月4日(水)
男女共同参画センター ムーブ メインホール

張さんの励ましの言葉をいつも思い起こしながら仕事をしてきました。

さて、今日はあれこれ考えているうちにこの演題になりました。「管見」は非常に視野の狭い意見、といくらかへりくだった意味を持っています。「徒労」とは無駄骨を折るということですが、その内容はこれからお話させていただきます。「相模国愛甲郡中津村」この作品は短編の推理小説で、コント風な味付けがされています。この作品の中に清張文学の本質が隠されているような気がしますので、それを中心に話して参ります。

私は清張さんの本質は推理小説にあると思います。非常に上質な推理小説です。清張さんが書いた推理小説は、先に犯罪ありきではなく、犯罪までのプロセス、動機を執拗なまでに追求します。そして犯罪は当然社会と深く関わり、社会性を帯びたものであり、その意味で社会派といわれるようになりました。私自身は清張文学を語るとき、初期の作品群や一連の社会派と言われる推理小説を大事にしていきたいと思うのです。

私は明治初年、すなわち日本資本主義草創期の、政商（政治に関わり、政府から利権を与えられた商人）に注目しています。近代産業のない我が国において、産業を興していくためには政府がこれに関わらなければならず、その中で政商が跳梁していきました。最近、その中のひとり久原房之助を主人公に「惑星が行く」という長編を書きました。彼の叔父に藤田伝三郎という人がいますが、彼も明治初年の政商と言われた群の中の一人です。伝三郎の藤田組は明治10年の西南戦争で莫大な利益を得て財閥のようになるのですが、薩摩の犠牲の上に伸びたことから、薩摩の人々は非常に厳しい態度を取るようになります。そしてそのころの警察の中枢には薩摩出身者が多かったのです。明治12年、藤田伝三郎はじめその一族が偽札作りの嫌疑で逮捕・勾留され、天下を震撼させました。税金として納められた二円札の中から二千枚の贋札が見つかったのです。贋札は非常に精巧に出来ていました。警察は事件の元凶として元勲・井上馨を挙げようとしていました。

当時日本にはしっかりした印刷技術がなく、ドイツで紙幣を造っていました。井上馨はフランクフルト

で造らせた贋札を元勲の地位を利用して持ち帰り、一部が藤田組にわたったというのが警察当局の考えでした。井上馨は幕末に活躍した志士の一人ですが、財政通であり、明治維新にあたっては、イデオロギー、エネルギーとともに金が必要であることを痛切に感じていました。維新において長州藩に対する財政的貢献は計り知れないが、新政府においても財政確立のため財閥と癒着していったのは事実です。西郷隆盛に「三井の番頭」とひやかされたように、三井・三菱などの財閥に非常に深い縁を持つようになり、当然、同郷の藤田組に対しても援助を行っていました。

時の元勲に司直の手を伸ばすことは非常に困難でした。何とかして藤田伝三郎をもとに井上馨の存在を引き出し、一気に長州閥を潰すというのが薩摩閥の警察権力の筋書きでした。しかし、警察の思惑とは異なり、伝三郎の自供を引き出せないうちに真犯人が捕まります。相模国愛甲郡中津村の人です。無理矢理事件に蓋をしたとも取れるような顛末です。裏に何かあるに違いないのですが、うやむやのまま明治百年が過ぎ去ってしまいました。

この話に注目したのが清張さんです。贋札事件、井上馨、藤田伝三郎と事件・登場人物は揃っています。社会派推理小説作家としてこれほど面白い材はないはずですが、私は「惑星が行く」を書くにあたって藤田組贋札事件は避けて通れず、清張さんの「相模国愛甲郡中津村」「不運な名前」を読みました。私は前者のほうがエスプリが利いて面白いと思っています。

「相模国愛甲郡中津村」では、《私》が神田の古本屋で老人と出会います。話すうちに老人が愛甲郡中津村の出身であることがわかり、二人の会話を通じて藤田組贋札事件が展開されていきま

す。老人は「事件の元凶は実は大隈重信であり、それを隠そうとした自筆の書簡を持っている」と語ります。その書簡を「私」は手に入れるのですが、最後に至って、老人が偽の書簡を造り高く売りつけ逮捕されたことを新聞で知り、愕然とするという内容です。読者は謎に包まれたままの藤田組贋札事件が解き明かされるとわくわくした途端、とんでん返しをくらう内容となっています。作品は「私はその偽大隈文書を珍藏している。」で終わります。今まで読者が胸を躍らせ一生懸命に読んできたのに、最後に肩すかしを食わせる。これは徒勞の作業です。私はこの作品を読んで連想するのは芥川賞受賞作「或る『小倉日記』伝」です。

「存知の通り、森鷗外が小倉時代に付けていた所在不明の日記を、主人公の青年は取材を通じて復元しようと試みます。青年は不自由な体になち打つように一生懸命頑張り、母親も必死になちて助けます。本当に涙ぐましい母と子の物語です。しかし主人公の努力は実らないまま病気で亡くなってしまう、その後別の場所で鷗外の小倉日記が一括して見つかるという話です。この母と子の努力もやはり徒勞なんです。

しかし徒勞はまったく価値のないものなのか。徒勞は悲しく、そして美しい人間の行為であることを、清張さんは全作品で語っているのです。

「魚釣りは鮎にはじまり鮎に戻る」と言われませんが、やはり「作家も処女作にはじまり処女作に戻る」ような気がします。「或る『小倉日記』伝」は清張さんの処女作とは言えないけれど、出世作であることに間違いはなく、「この作品の原形がどの作品にも投影し、メチエ^{*}となっていると思います。

*メチエ：作者の技巧・技法・技術

挿画展 松本清張作品を彩る単色の世界

すぎまた だし はまの あきちか
杉全直・濱野彰親

期間 平成17年1月15日(土)～平成17年3月31日(木)
場所 松本清張記念館地階 企画展示室

挿画は、文学作品が初めて読者の目に触れるとき、視覚的にも作品世界を形作り、読者のイメージを膨らませる一要素です。

自らもデザインを仕事とした経験を持ち、絵画の世界に強く関心を寄せていた松本清張という作家にとって、挿画と作品は深い関係にあるのです。

本企画展では、杉全直氏が手がけた「風の息」と、濱野彰親氏による「十万分の一の偶然」の



濱野彰親

挿画を、清張とのエピソードや創作過程など交えながらご紹介します。

雑誌や新聞をリアルタイムで読んでいた読者には懐かしく、当時を知らない読者にとっては、挿画がもうひとつの作品世界として新鮮に映ることでしょう。そこには、リアルで重量感ある風景と、活字から立ち上がり生き生きと躍動する登場人物たちが見出されるはずです。



杉全直



清張原風景

点描

乃木神社

「先帝祭の記憶はあまりない。花魁の道中がおぼろに印象に残っている程度だが、乃木神社の祭りはかなり強い記憶になっている。乃木大将の勲章を着けた軍服が子供心に珍しかった。一度、近所の人力車に乗せられて乃木神社に父といっしょに行ったことがある。煎餅か何か買ってもらったが、それが私の幼時の最大の贅沢であった。」(半生の記)

乃木希典は、長府藩士の子として藩の江戸上屋敷に生まれた。十歳のとき父母とともに長府に戻り、勉学のため十六歳で萩に行くまでを長府で過ごした。

明治天皇への殉死後、少年時代を過ごした長府では旧乃木邸の復元、保存を目的として「乃木記念会」が結成され、大正三年旧邸の復元と陳列館が建設されたという。旧邸は、六畳と三畳の間、押入れに二畳の土間という質素な造りであり、六畳の間に



旧宅内の木像



乃木神社境内の旧宅

は、少年時代の希典と両親の像が置かれている。その後、隣接して乃木神社が竣工するのは、大正八年の暮れである。

清張は大正六年には下関から小倉に移った。父・峯太郎と行ったのは乃木神社が竣工する前の旧邸と陳列館だったと思われる。七十歳をこえて初めて赤坂の乃木大将旧邸を訪れた清張は、「清張日記」に次のように書いている。

「赤坂の乃木大将旧邸を初めて見る。雨の日。邸内の小屋の軒下に、山口県長府の旧宅写真があり、父母が少年時の希典を訓戒する木像が出ている。自分が五つくらいいとき、壇ノ浦から人力車で父親に乗せられて長府に行き、乃木神社境内でこの実物を見ている。想い出してなつかしかった。」

(中野 吉明)



古鏡

『清張日記』の中で、松本清張は「古代史関係のものを書いていけば、現物をいつでも手にさわるところに置きたくなるものだ。」と述べています。以前紹介した銅鐸と同じく、古鏡（銅鏡）も、現物を見もしないでという誘いをうけないための「自己の資料参考品」として蒐集し、漢式鏡を中心に十八面を所蔵していました。ちなみに方格規矩鏡が五面、盤龍鏡が三面あり、特に数多く集められていました。うち三面の鏡を展示していますが、残り十五面は第二展示室再現家屋内「資料室」のガラスケースに、清張生前のまま収められています。※

写真は、展示中の唐草文縁方格規矩四神鏡（後漢）です。中央に紐を通すツミがあります。これを鈕（ちゆう）といいますが、その周りに方格（正方形）がめぐり、外側の各辺中央に丁字形、その向かい側にし字形（規＝定規、方格の対角線の方向にV字形）「矩」の図文が見えます。中国後漢代に盛行した鏡ですが、こうした図形が何を表しているか。六博盤（遊技の台）の図形を模したもの、天円地方の宇宙観の表現など諸説があります。清張は『古代史私注』（「本」昭和五十一年二月号〜五十五年十二月号、講談社）で方格は「明臺（明堂）」、中央の高く丸い鈕は「天子の御座」、丁字形は壇への登り口で「壇垣」と見、「西アジアのジグザグ（聖壇）からの影響」を推測しています。



八年六月十六日〜四十九年十月十三日、朝日新聞で考え始め、「ベルセポリスから飛鳥へ」（昭和五十四年五月、日本放送出版協会）で詳述しています。この間、ジグザグの性格とその東方への影響伝播の考察を深める過程で、方格規矩鏡にも注目したのでしょうか。終生邪馬台国問題を考究しつづけた清張ですから、もちろん「大率」（松本説では魏・帯方郡の官が特置された伊都国をふくめ、弥生時代後期の北部九州の遺跡から多数出土している同鏡を、その「参考品」として数多く入手したということもあるでしょう。その一方で、方格を「明臺」と見て「中国における東西文化交流」の古さの論証とし、ひいては日本古

代へのベルシア文化の流入、あるいはベルシア人の渡来を主張する自説の補強になると関心をよせたのではないのでしょうか。以前、企画展「火の路」誕生秘話で、古代史家門脇禎二先生宛の年賀状（昭和六十一年）を紹介しました。それにも、方格規矩鏡（写真）の拓本が添えてありました。文に最近入手した漢式鏡とあり、「兎が仙薬を搗き西王墓が手を出して之を求むる」画像があるので、兎の歳に因んで年賀状にしようとしたとあります。これなども『火の路』で発表した飛鳥の酒船石の用途（薬種・ハオマ酒製造）と関係するでしょう。蒐集した十八面すべての鏡の背後に、このような不断の探求心と関心があつたものと思われま

す。（学芸担当 中川 里志）

※今年度未発行予定の「松本清張研究」第六号で清張古代史を特集するにあたり、普段見ることのできない「資料室」内の鏡もじっくりと所蔵鏡を写真に北九州市立自然史・歴史博物館特別研究員藤丸詔八郎氏の解説を付して紹介します。

老よしとハルコの探検！清張記念館

IF 再現家屋 “応接室”の巻



清張は右手前、編集担当者は左側のソファーに座って打ち合わせを行った

きよし いろいろなものが飾ってあるんだな、解説によると…古代、近代、現代、中国のものもある。

ハルコ でも古今東西ジャンルを問わずその中で不思議と調和のとれた部屋。清張作品みたいね。

きよし そして、ここに座って編集者が待つわけだろ？ そうしたら先生が入ってきて、ここに座って…うーん緊張する。でも一番最初に作品が読めるってのはすごい特典だ！

ハルコ 清張さんは担当者にしつこく意見を求めたり、「どうかね？」って訊ねてたそうよ。しかもどこがどういうふうにか具体的に細かく。

きよし うわー、プレッシャー。やっぱ僕じゃ務まりそうもないや。

清張作品の発信最前線。調度品一つひとつが清張作品を形成したものかもしれません。(?)
清張を思い、編集者とのやりとりで思いをはせる(併設の映像「松本清張の残像」も一緒にどうぞ)、応接室は常設展示「思索と創作の城」一階です。

今回は「清張作品のここが好き!」と題して、皆様のアンケートの中から、清張作品の読後感を中心にお寄せいただいた意見をご紹介します。

清張作品のここが好き!

- ・先生の小説は単なる推理小説ではなく、史実をふまえ、登場する人物の生きざまをひしひしと感じます。重い、しかし現実です。(50代・大分・男)
- ・古代への疑いからはじまる探究心、その他推理小説の犯人に“人間”を感じさせるすべての作品に心ひかれます。(50代・兵庫・男)
- ・どの作品も人として、人との関わりなどに共通している事がある様で大好きです。改めて今から松本清張の未だ知らない多くの物も含め、読んでいけたら、いえ、いきたいと感じています。(50代・兵庫・女)
- ・一点から全面に展開する雄大な構想力、展開力、推理に感激。(50代・京都・男)
- ・清張作品の三分の一くらいしかまだ読んでいませんが、どれも好きです。最後の一文が心に残るような終わり方の作品が多いと思います。(40代・山口・女)
- ・松本清張の作品は読書する事が嫌いだった私を変えてくれました。本当におもしろく、考えさせられる作品ばかりです。これからもずっと愛読していきます。(20代・山口・女)
- ・作品は未だ少ししか読んでいたのですが、清張さんの物の真実をとことんつきつめていく力というのを感じ、これから他の作品をもっと読んでいきたいと思えるようになりました。まわりに流されないすごい人だったのだと思います。(30代・兵庫・女)

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見等をご紹介します。清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。
※アンケートは館内にも置いてあります。

友の会 活動報告

● 平成16年度年次総会

(8月4日(水) 参加者58名)

松本清張記念館企画展示室にて平成16年度年次総会を行いました。任期満了に伴い役員が改選され、新役員の紹介が行われました。

平成15年度事業及び決算報告、平成16年度事業計画及び予算案についても審議され、いずれも承認を受けました。

● 第7回清張サロン

(9月23日(木) 参加者16名)

リバーウォーク北九州の朝日さんさん広場を会場に、梅光学院大学教授・小林慎也先生を講師にお迎えして、「赤いくじ」をテーマに清張サロンを実施しました。参加者からは実体験を交えた意見が語られるなど、活発な意見交換が行われました。サロン終了後、記念館学芸



員の案内で企画展「松本清張の軍隊時代——朝鮮の風景」を見学しました。

● 文学館見学会

(10月22(金)・23日(土) 参加者18名)

今回は、かごしま近代文学館(鹿児島市)を訪問しました。鹿児島にゆかりのある近代文学の作家やその作品を紹介している文学館で、河野次長にご案内いただき、館内を見学しました。常設展示のほか、椋鳩十生誕100周年を記念した特



別企画展も開催されており、見応え十分の内容でした。

友の会会員募集!!

ただいま友の会では新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。会費は、8月から翌年7月までの1年間で3000円となっております。

■ 友の会事業

- ・ 講演会、シンポジウム等の開催
- ・ 読書会、文芸講座等の開催
- ・ 映画ビデオ等の上映会の開催
- ・ 会報の発行
- ・ 松本清張ゆかりの地、他都市の文学館見学事業の実施 など

■ 会員特典

- ・ 常設展の招待券(年間4枚)進呈
- ・ 企画展(年2回)のご招待
- ・ 記念館主催事業のご案内・参加
- ・ 記念館広報誌(館報)・企画展図録進呈
- ・ 友の会主催事業のご案内、会報の進呈
- ・ 友の会オリジナルグッズ(ペーパーウェイト)の進呈(加入年度のみ)
- ・ 喫茶「石の館」(記念館内)の飲食料金1割引

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

朗読劇「或る「小倉日記」伝」 上演される

日時：平成16年11月6日(土)18:30～
松本清張記念館屋外特設ステージ

友の会行事の朗読劇「或る『小倉日記』伝」が、今年、屋外での上演で実現しました。小倉城の石垣をバックに幻想的に浮かび上がるステージでの熱演に、ラストでは涙ぐむ観客も多く見られました。



津田 恵一(白川 慶一郎 他)

今回初めて朗読劇に参加させてもらいました。



私は最初、アナウンサーになりたくて、アナウンス学校に通った事もありましたが、いろいろな事情で断念しました。

劇団に入り立ての頃、よく子音がはっきりしないとされたものです。

学校でマイクを相手に授業をしていると、自然とマイクに対して息の加減をしよう癖が身についていたので、舞台の発音とマイクに対しての発音の違いがなかなか使

い分け出来ず、苦しんだ経験がありました。

座に入って何回か、ラジオの朗読劇に出演したことがありますが、今回、清張記念館の石垣前で、朗読させてもらったのは自分にとって初めての経験でもあり大変良い時間を過ごさせていただき、ありがとうございます。御座いました。

11月6日の夜は、少し肌寒かったですが、お客様の真剣な眼を感じ、本当に演じる側と客席が一体となって演じることが出来、すがすがしい気持ちで終わることが出来たことを感謝しております。

又、機会がありましたら是非参加させていただければ幸いです。

浜名 実貴(耕作の母ふじ 他)

第一回の『西郷札』は雨のため記念館の屋内に場所を移動しての朗読劇でした。



そして第二回目の今回は、念願の小倉城の石垣をバックに屋外での朗読劇です。

11月なので夜の冷えが少し心配でしたが、照明・音響・記念館スタッフの皆さんの完璧な設営に、私たち前進座メンバーのポルテージも大いにありました。

今回は「或る「小倉日記」伝」です。前進座の女優の会「花みづきの会」で、2000年に、一度だけ舞台化したことがあります。その時、私は原作には出てこない耕作の叔母の

役で出演致しました。脚色の鈴木幹二が創造した小倉女性の典型のような役でした。

今回は朗読劇ですから耕作の母ふじを始めとして、女性の役は全てやらせていただき、それぞれの役のイメージをふくらませながら楽しく、一生懸命つとめさせていただきました。鈴木幹二の脚色は、原作の中からさらに母性や母子の絆をきわ出たせるものでした。読みながら何度も胸が熱くなりました。お客様もよく集中して下さって「或る『小倉日記』伝」の世界を共有できた素晴らしいひとときでした。少し寒かったけれど心はポカポカの忘れられない一夜です。

原作の力と、それを愛するお客様に支えられたこの朗読会がこの先も続けていられることを切に願っています。

文芸演出部 鈴木 幹二(脚本)

去年の「西郷札」に引き続き、今年は「或る『小倉日記』伝」を上演させていただくことになりました。この作品は云うまでもなく、松本清張の文壇出世作であり、小倉にとっても象徴的な大切な作品です。このような作品を記念館で上演することは、畏れのような感じに驚かれるのではないかと危惧しておりましたが、本番までの数日間、不思議に穏やかな安心した気持ちでいられました。私が小倉を初めて訪れたのは18年前。それから私用を含

めれば延べにして三ヶ月以上は小倉の住人であったと思います。あれから小倉の街は大きく変わりました。しかし私個人の印象としては何も変わっていないような……。十数年前、耕作とふじの姿を探し求めて、小倉の街を憧憬の念をもって歩き廻ったことを思い出します。そして今回、この二人の物語を、小倉の方々の前で、屋外にて遠く人々の喧騒が聞こえる中、上演する。私にはこれだけでドラマでした。本当にありがとうございました。

すぐ会えるよ

柳生 啓介(田上 耕作)



泣きました。田上耕作の台詞を読むたびに涙が溢れ出て仕方ありませんでした。初めて耕作の心を表現できたと思えました。役者になって20年

役と自分の心が一つに

なるとはこんな凄いこ

となのかと知りまし

(遅すぎる……。20年

かかるなんて。)

それにしても台詞で

は大変でした。体の奥から

のすごい感情の中では、

格調高い原文を冷静に読

むことはとても出来なかつ

たのです。俳優失格！

お恥ずかしいかぎりです。

私と耕作の出会いは4年前。「或る『小倉日記』伝」

が東京の前進座劇場で上演された時です。私は彼の

生き方に強く惹かれ全身全霊で演じました。耕作や

清張の調べて歩いた小倉の数々の場所を私も歩きま

した。鶴外の行動を追って柳川、佐賀、久留米まで足

を延ばしました。あの時、田上耕作と出会えなければ

今の私はない！と言っても過言ではありません。記

念館のスタッフの皆さんとの出会いもその時です。

以来、記念館の皆さんにはお世話になりました。

そして昨年の「西郷札」に引き続き、野外朗読劇「或

る『小倉日記』伝」を企画していただき、私は再び

耕作に会うことができたのです。

小倉の地で、それも清張記念館内の特設野外ス

テージでの公演は私には至福の時間でした。宝物

のような体験でした。寒い中、じっと見守ってく

ださった沢山の観客の皆さんには感謝の気持ち

で一杯です。本当にありがとうございます。カ

ーテンコール、皆さんの熱い拍手の音を聞きなが

ら私は少し寂しかったです。だってせっかく再会

できた耕作ともうお別れしなければならぬので

すから。でもその時、私に向かって話しかけて

くる誰かの声が聞こえたような気がしたのです。

「大丈夫、すぐまた会えるよ」

あれは耕作の声だったのかなあ……。

研究誌

松本清張研究

第六号(予告)

年一回発行の『松本清張研究』は第一線の研究者を網羅し、全国的な研究推進の牽引車となっています。つねに新鮮な特集を組んでいますが、第六号では清張古代史を取りあげ、その現在を検証し軌跡を紹介します。発行は来年三月末予定。

特集 松本清張古代史の軌跡と現在

■講演

飛鳥の石造遺物と斉明天皇——酒船石遺跡と益田岩船
直木孝次郎 (大阪市立大学名誉教授)

■対談

清張古代史の現在を再検証する——邪馬台国論と『火の路』を中心に(仮題)
門脇 禎二 (京都府立大学・京都橋女子大学、西名誉教授)
森 浩一 (同志社大学名誉教授)

■論文

松本清張の古代史研究
上田 正昭 (京大名誉教授)

「石の骨」の虚実
春成 秀爾 (国立歴史民俗博物館教授)

『火の路』検証
山口 博 (聖徳大学教授)

松本清張の邪馬台国論
岡本 健一 (毎日新聞客員編集委員・京都学園大学教授) 他

■作品論

「断碑」と「石の骨」(仮題)
秋山 駿 (文芸評論家)

「眩人」(仮題)
陳 舜臣 (作家)

古代史の薪は二度燃え上がる——「陸行水行」の成立と展開
郷原 宏 (文芸評論家)

仮説を語る小説——「東経一三九度線」
綾目 広治 (ノートルダム清心女子大学教授) 他

■書誌

清張古代史の軌跡(作品と著書)

●編集後記●

今年もいよいよ終わりとなってしまいました。本当にあっという間の1年でした。来年もよろしくお願いいたします。

(中野 吉明)

松本清張研究会

第11回 研究発表会

12月4日、松本清張研究会の「第11回研究発表会」が愛知県豊橋市の愛知大学で開催されました。中京地区では初めての開催でしたが、会員、友の会会員など70名余りが出席しました。

まず、詩人で梅光学院大学教授の北川透氏が『万引き・剽窃・パロディーというトリック——松本清張一側面観』と題して講演、清張作品「生けるパスカル」とそのなかで引用したイタリアの作家ピランデルロの「死せるパスカル」との比較、検討などを通じて清張作品を論じました。

次いで、同志社大学教授の真銅正宏氏が『「大衆」はリアリティーを

欲している——清張推理小説の淵源』と題して研究発表、大正、昭和の大衆文学論争などを通じて清張推理小説の淵源を探ろうとしました。



北川 透氏



真銅 正宏氏

第7回

松本清張研究奨励事業 募集中

～平成17年3月31日まで

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

新北九州空港 2006年3月開港



新しい空、新しい私。



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です(小倉城第二下車)
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

